多田孝泉

略解古事記

四

和書
百五三〇號

乙亥三月
十四日献本

和書門
類
一〇五三〇號
一〇〇函
一一架
六冊

内閣文庫
和書
類
一〇五三〇號
六冊
一三七函
二架

内閣文庫		
番號	和 10530	
冊數	6（ 4）	
函號	137	22

内 一二六七…

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

淺草文庫

略解古事記巻第四

神洲 天台沙門多田孝泉 謹略解

既生國竟更生神。

記傳五三十号こは先ニ大八嶋を生み次ニ六嶋を生みまし既ニ國々を生み竟み更ニ神々を生みたまふと前を結びて後を起せるなり

故生神名大事忍男神。

那岐那美二柱の大神天神諸の大命を以て天降坐し大御

内一二六七七號

國が至妙に生成し以て蒼生が神域に誘引し廣大の神徳が成辨せしめたまふこと實に至大の神業なり是以て其大事が押立る創業に能く安忍せる御力まさ世にも男々しき此大神が最初に生れたまへるなり記傳に此神より速秋津比賣神までの十柱が阿波岐原の禊祓の時に成ませし神々とし紀の一書がひき合せらるときごとへひとつもとるべきにあらし

次生石土毘古神。訓石云伊波亦毘古二字以音下效之 次生石巣比賣神。

此二柱の名義ハ文字の如し其神業ハ世俗の諺に石の上にも三年といへる如く何事にてもその一つ成就して家が興し其業が子孫に永く傳むと欲する男子ハよし露地に坐し石上に臥すとも一たび思ひ立たる大丈夫の志願が果し遂るまでやは止べきと其志が盤石の如く固く其心が大地の如く持て其業が苦修煉行するこの即との石土日子の守り幸ひますも神業なり女子も同じことにていへのよいぶせき賎がふせやのむろしとなりぬともよみ家事が守てまめに夫に仕へよく子孫が生育して家名が永く相續せしめむと夫婦のこゝろみに相思ふ真心のこしはの如くかたきぞ石巣日女の守幸ひますも神業なりと知るべし

若き男女はこゝにて此二柱の神業をふかくこゝろにしみて御神
さらにこの如く石土石巣の神業をつとめましてこそ大
事を成辨まへさせ給ひつきましてはいかんや神ならぬ凡人の
身におきてをやと真心に神業の御教を信知しこゝろみに
家々の産業をはげみつとむべし註に訓石云伊波とある
は伊志ともよむ字なるが故なりいはほの如く志をかた
く立べし

次生大戸日別神。

大は廣大戸は門戸日は徳光別は持別の義なり既に前二
柱の神業を能く安忍し勤を得たる男女は次に此神の御
業を勤むべしさては大に門戸を開きて其成得たる徳光を
世に輝し國を利し民を益させる為に廣く諸子を招集して
其産業を教授し以て能く持別せしむるを心とさするが即こ
の神の守幸ひたまふ神業なり

次生天之吹上男神。

名義は文字の如し此神業は已に能く産業を持別させたる
上には更に其諸子をして空ふく風の如く何方へなり
とも縁にまかせ宜きにまかせつかひ其業を吹き起さしむる
が即この神のむねとし守幸ひます神業なり此神代より
ふきつたへたりし國の風ふきこそわたせ潮の八百重に

次生大屋毘古神。

名義は文字の如しこは前の神業を能く成し得ゝ所々は特別ひろきたる上には更に立しつりくその根本たる宗家の大業をいよく堅固にしつゝきよく盛大になし以て根抵枝葉とゝなきましく末久に立榮ゆんことをとひのゝ本末の諸子一つくみに真心をつくし産業永續のため底津岩根に宮柱ふとしき立高天原に氷椽たかのまつるなどのり宗家を廣大に成立し以て本末の軌則を嚴重に確定り其基礎を堅固にし其門業を永昌せしめんと諸子一和の眞心をそとびく宗家を守護し尊重まつる即との神のめでよろこびて守幸ひたまふ神業なり　高き屋をいとやつくらむ大君のみぎにそふ民を見そなそなて爲　子どもらが御とのつくきば大君は御祖まつまして鳥見の神垣

次生風木津別之忍男神。訓風云加邪　訓木以音

記傳に訓風云加邪舊印本又一本には加字脫たり今は延佳本又一本に依まり訓木以音といと心得まて字の誤かるべし故思に以音二字は云宜の誤なるらん又思に加字無き本もあれどもと訓風云訶邪木字以音とありしなるべし此註の外なる註とその手振のたがへるをいぶかりしは風氣津別なるべしとあげつらひいへり註の加邪はカゼなれ

ばカゼの約ケなるゆゑ宣長のいふところも一義なるべし
まづ延佳本に木字の音モクなるによりて木をモとよみ
たるも其義あり故に両説いづれを是としいづれを非とも
さだめがたし　されどケとよむもモとよむもその名義は
大方同じ故に註語の如く延佳がよめるにしたがひて説
くべし此神の名義は天神の風教が能く負持る別の忍男
神といふことなりゆゑに木津の津はテルの約めたるツなるべく
モテルなり又ツはチなりと知るべししかるに大屋日子の神
業がのしこそて産業の大本なる宗家が盛大に成立し本
末の軌則が嚴重に確定しける上にはその軌則によりて宗

家の風教が能く負持其大業が四方に廣く弘通せる職掌
に堪たる忍男の神徳ある者が撰擧し以て其職位に任じ
かの四道将軍の如く四方に別遣し宗家の大命が相傳て
神風が天下に敷き鎮に國が利し人が益せるが即大屋毘
古神の次に此忍男神が二命の生たまふ神意にしてま
た此神の守幸ひませる神業なり大事忍男神より此御神ま
での七柱はすべて天の益人らが各々其分に應じて志願
が起し其事業が皆能く成辧すべき為に神則の大旨が御
身が以て示し事の本末業の始終が教おほせましたる神
業がなくさる御名にしてかれ生起曼荼羅の諸尊の利生

の為に法門身が顯現ましますと全く同じことなりさて此次々の神々もまたましますものなりゆゑに其意が信知して神々の御意の如く利國利生が先とし心として七柱の神業が學ぶ人々は神々の御意にかなひて其利益がかうぶらむことは實に廣大不可思議なるべきなり忍男の忍は押の義にして志のも世の違順に能く安忍せる神根神力の坐ます御神ぞといふことが知らしむる為に心して押の借字に忍字が用たるものと知るべしと記傳に大の義とかくなるにいふは大事の大と重言になるといふことに心づかぬときごとなく九河内のオホシは大押の義なるに心づかぬにこそ

次生海神名大綿津見神。

通證三一号に玉木翁曰海産也魚鱉錯出川變也淺深不定山止也無動之謂と見ゆるはいづれもたがへりウミといふ言の意はウは多種逼迫聲にてアウと口が合を如く物の一所に逼迫しよりあつまりあふよる時に出る聲なりされば海のウは百川の水がウと一所に受け合せ持るがいふにミは即其水なり万葉十五に宇頭之保爾多麻毛可流などある宇また梅の子などの熟して水が含持るがウミなりといふにてウミといふ言の意が知るべし川は皮の義なり

木の皮身の皮などの如く山谷より出る水が両岸まで能
くつきて海へ流れいだらしむるがゆゑに川といふなり
そのむね波の字にても知るべくまた坡字がつくりにも見
るにて知るべし山は塵の積りて山と成といふが如く國
土の物体なる塵といふもののいやがうへにもいやますそくに
高くつもりたるが即山なれば山は彌増の義なり故に其
山と積りたる塵土が平らかにひきならせば即野となる
なり山といひ野といふ其義おもひ知ぬべし今海神とい
ふ海は其處がひげたるなれば其御名と同じさまにこが
ワタノカミとよむはわろしウミノカミとよむべし大綿津見といふ

言の意は萬葉に志我能大和太など有ると同義の辞にて
海の水といふものはいづこまでもよくゆきわたりめぐれ
るもののゆゑその海水が持知る神徳が志の稱申せし名義
なりと知るべし見はモチの約りたるミにて持の義なること
と次に二神因河海持別と有るにて知るべし海は船にて
渡るもののゆゑことがワタといふとの考はさることなれどワ
タのワは輪の義タは足るの義ゆゑ船にてわたるといふ義
よりもまたこの浦にしやうちわたるといふ義のうへやワ
タといふ言の本義ならむこのみおふべしまた海のことが綿
といふは重浪の貌の木綿に似たるゆゑにワタといふとい

へる説もあれどさらば浪のしらゆふと歌によめるゆゑワタツカミをユフノカミともいふべくまた浪のしらまさとも歌によむべしはよさることとあらんや綿は借字なることをおもはざる説にこそさて前の七柱の次に此神を生ませるは次なる水戸神の知らせる水のをさまりどころを知らせる爲に此海の神を先に生ミたまへるにて此次々生ミたまふ神々は蒼生を生育したまふべき物の第一なる稲の爲をむねとして生ミたまふ神々に坐すなり稲は蒼生の食して活命すべき物ゆゑにこれをよねといひ世の根といふ義にこれをいねといふは命(イノチ)の根といふ義なり世人の金銀を寶(タカラ)物とたふとぶもさることとなれどその言のもとは田にみちなりいでゝ人の命をたもたるゝ物なるこの稲をむねとつくまる國民を物むねたるのといへる。此言の大もとなるたゞそれは天の川水せきいれて齋庭(ユニハ)の稲穗つくりそゑけむことはうしとくも蒼生(アヲヒトグサ)の食て活べき爲にこそ

次生(ツギニウミマギシ)水戸神(ミナトノカミ)名速秋津日子神(ミナハハヤアキツヒコノカミ)。次妹速秋津比賣神(ツギニイモハヤアキツヒメノカミ)。自(ヨリ)大事忍男神(オホコトオシヲノカミ)至(マデ)秋津比賣神(アキツヒメノカミ)并(アハセテ)十神(トハシラノカミ)。

此註至の下に速の字を脱せるこの水戸は土左日記にあはのみとを渡るとあるが如くミトとよむべし其戸は栗門などゝ同じ義にて河水の海に流れ入る所をいふなりけ

ざし今水戸ノ神といふはたゞ水戸に坐ますといふことにてはな
しとは水戸を以てそより出入(スイヌイ)する水をすべて持別知(モチワケシリ)ま
す神といふことをいへるにて其水を持別知ますは稲の為を
むねとして知りしますゆゑ速秋津といふ御名を負持ませ
るなり此神の御いさをしをいはゞ山のこの木の芽も
る雨ふるころは種(タネ)をしおろしわたくしぎさなく音をきし
く五月雨のふる川のべは早苗とるしづのをとめあせて
よびて其高津日のいや照るをあふぎこのしこそ水無月に
水をせきいれてつくりつる田の面を見ればふくづきのこ
ましふくめる稲草のそこにこのしこにわのくと穂にいづる

そよぐ早秋のをさ田にみのりてんところまでぞこの二神の志
ろしめせる水のちからを水分(ミクマリ)の神の水分さきてひくたび
てんことを久方の天の益人おしなべてたのめることを
こまやかによろひしぬびてこの神の持別志らすをまつ
その海よりひろく河よりもふかきめぐみいさをしを
おもひこのしこみのしこみてさげなや人ゆかげをせ人
君の為親の為とて子どもらぞひぢのきをうけて早苗と
るなり　よき衣をきせてもいこのじよき太刀をうけても
いこのねこのくる子らによりて

此速秋津日子(ハヤアキツヒコ)速秋津比賣(ハヤアキツヒメ)二神(フタハシラノカミ)因(ヨリテ)河海(カハウミニ)持(モチ)

別而生神名沫那藝神那藝二字以音下效之次沫那美神那美二字以音下效之

沫ハ字の如く水のアワのことにて波の和たるさまと波の立たるさまとをナギナミといへるなりこは海よりさしのぼる潮と河より流れ入る水と行き合ふ水門にて水沫の立もし消もするそのさまをもていへる神名と知るべし祝詞考中卅丁に速川之瀬坐須瀬織比咩止云神塩乃八百重爾坐須速開津比咩止云神といへる神名を織ハ借字にて湍於呂志ちふ呂志の約利なれバ於利といふ川水の下る瀬に坐故也是ハ水分神を申歟水戸ハ水の門にて川の海へ入く開く所故に開ちふ神の御名ハかゝる也この神ハ水門の水の行到るかぎり知ませよしこゝく往會爾坐ともいふそりと説きたるハ大祓の祝詞なる神名故なり説きたるなるべしさぞれ今てゝに此神々の生きたまふハ那岐命の阿波岐原にて禊祓したまふ爲に生とも生まもしたまへるにてハなきゆゑに此神々の水を知りまさ神業の本つ意につきてかのさハ名義を説くなり此記ハ此記にそ神々の生起次第に各其ことをうりかゝるが故にその本理本意をよく考え説くべし一法の左右其義を殊にするとゝりとして一神の神業にも其時所にまつかひ其德用をて

とよなりしたまふむねなるときはおもふべきなり云云

次頬那藝神。次頬那美神。

頬は川づら海づらなどいひこは見ゆるを水の面のよくつらなりなごめるはさまをよくつらなりたゝへるさまをもていへる神名と知るべし

次天之水分神。訓分云久麻理下效之 次國之水分神。

久麻理は分配することなり天と國とのくみはつのさどり持別ましてこの二神の水をくまりあたへたまふといふ御名の心なり神名式に大和國吉野郡吉野宇陀郡宇太山邊郡都祁葛上郡葛木等に各水分神社あり續紀に文武天皇二年四月奉馬于吉野水分峯神祈雨也と見ゆ又万葉七に三芳野之水分山とよめるは此なり古歌に美許毋理神とよめるよりはや吉野なる此神の御社へ子の無き人々あゆみをはこびいのりまゐらせるしるしありとのさたも人あまねくしれりことはさもあるべきことなれど神は万徳をそなへませば何事にても御心のまゝなれと見まして利益をたれたまふものにしませばこのくまることゝらをきゝて世の學者たちこれをおのづからなるわざとおもひけりそのまゝるしをえたりといふも神徳のいつまでることよはなるじといひければおのへりくおろそのなるものわざにこそ

次天之久比奢母智神。自久以下五字以音下效之 次國之久比奢母智神。自沫那藝神至國之久比奢母智神并八神

記傳五に云は久比奢母智は汲瓠持なり美比を約めて比といひ碁を省けりその省ける碁の濁の佐へうつりて奢となりたるは語の自然の勢なり水分神と同じく凡て萬に水を施して功を成さしむる神なり和名抄木器部に杓和名比佐古唐韻云斟水器也瓢和名奈利比佐古瓠也とあり註に自沫那藝神云々と云は速秋津日子速秋津比賣二柱神の生坐る神等の數を總べてことわれるなりといへりミヒの約はミなりヒといふはつるをもていふまやあるふは久

比奢母智はクヒヒサゴモチといふことを約め省きたるにや匏は其形くびれたるものなりこのみのふべし鎮火祭祝詞に志のぐはるへことなるひとつのつゞへなればこれをもく今をあげつらふべからむさまことをもそこれをいふこのるべからざれさて瓢を持て水を施したまふといふ神業をいふなりて風神は嚢を持せ雷神は鼓を持せて僧等の世人をたぶらかすにひとしきものなるべし然し實はさる神なからばそのひさごはいかなりの水を盛うるやなどかざける人もかくどそはものことすりはそくきゆゑはこそさるいふなりもかるなれ人の豆なりの火も

く野山をも心のまゝにやきつくすごとく此神も一瓢の
水なりとも十方の天にそゝぎ國にそゝぎ多くも少くも御
心のまゝにこゝろやどしまさんことゝなるにこのきこと
のはならむされば此神の瓢も志の妙なれば雷神の鼓風
神の嚢人間の火もまた妙々奇々なり水分神のふらせる
雨もなのきば龍神のふらせる雨もなりまさなくふる雨も
なり能因が和歌其角が發句までに雨を施せりいはんや
此神の靈瓢をや信受すべし　おなじくは酒となりに
し瀧の水くみてふらせよくみひさごもち
次生風神名志那都比古神。此神名以音

此神より又那岐那美二命の生たまふ神々なりこての
次は水戸の神の次なり生と云て久比奢母智神の次なり
ぬことが別てり紀の一書に伊弉諾尊曰我所生之國唯有
朝霧而薫滿之哉乃吹撥之氣化爲神號曰級長戸邊命亦曰級長
津彦命是風神也とあり纂疏に級長は息長といへるが如し
となり其由は師說に此神は大御神の御息より成賜へば
志那都比古とは云なり万葉歌に志長鳥と云は鸊鷉のこ
とにて息長鳥と云むに同じ同廿巻に爾保杼里能於吉奈
我河波とつゞけよめるが以知るべし此鳥水底に入て浮出
ては長く息づく故に然云ひけしなるらむ息長川は近江國

坂田郡なりさて科戸之風とハ此神の御名より云て凡て
の風のことなり西北の風をいふとハ後世のことなりと
記傳にいへり此説もさることなれど一書の風神ハ那岐大
神の長く息吹(イフキ)ませし御息(ミイキ)より化りてなれる神ましませ
バ|オキの約|イなれバ級長が息長(オキナガ)と見るもよかきど此記の
風神ハ那美命の御陰(ミホド)より生ましたまへる神なれバ一書に
よりてこが直にハときがたし此記ハ此記の次第に神々
が生ましたまふことわりのまにまにその名義をとくべし今
水戸神の次に風神が生ましたまふハ其水がもく養(ヤシナ)ひ立(タテ)ゝ
る稲穂の生々(ナマナマ)しきが秋より冬にいたる風もてふきこう

くそその實(ミ)のりがよかつ志ぞまゝくさゝんとしれ稲種(イナダネ)とな
りかゝまらしむるたゞに秋冬のかひともいふべき西北
のかひなる戌亥よりふきくる科戸(シナド)の風がむねと知りた
まふ此神が生ましたまふが即(チ)此記の意なり故に御名の|シ
ナ|とふ言ハ同じくとも其義のとかゝハかれとたかハ
りこは木草にもせよ何にもせよその自体に持(モテ)る水氣が
ふきかハかしくそがよく志なしかゝまら志むる|シナ|の義
にて千万の品物が皆それくにふきなしかゝぞてそがな
るべきこととわりのまにまに志なが(?)さぐまら志むるいさを
しなる風がつかさどり知ります神ゆゑに志那都比古神

と徳名が彌まをもちて大祓の科戸の文字よく其義にかな
さまり千草万木の春はもえいで夏はなりさち秋はかの
らみ冬はふゆごもるそなこれ天地の自然なる造化のこ
とわりなるがゆゑにそのことわりふまへのせてその御い
さをしゝなしたまふが即神業なり今此神はなすべくの風
が知りませどつきていそぐ秋よりふきおこりて冬にふ
きそつる風がむねと知りませ神といふべし志那の志は
風の体にて那は風の用なり大祓に科戸之風乃天之八重
雲乎吹放事之如久云々とあるが如く戌亥の風は風徳の
至極にて此方より吹く風にいたく天の八重雲のそうしの

くだらむ一切の木も艸も皆その葉がふきおとさるゝも
のにて志かもまことの風の為に木草とも冬ごもりして
またこんなるに芽がもりいださすべき力がうちに持もの
なりゆゑに此風の神の次に木の神を生みたまふなり記
傳にはこのしる神業のむねがえざると見ゆ科戸之風が西北
の風といふは後世のことなりといへりこは古傳の後の世ま
でつたへきたるものぞと心づかぬときごとにて事實に
ふるきかげつらひなりたゞ秋冬にかぎらずいつにても戌
亥のかたより風ふきおこればいかでうりいさくあらふ
る空にても見るがうちにそれきよくるものなり風といふ言

の意なりとこゝろえたりいさゝ風のおとをクアとなきたると
ころよりおのづからのカといづるカがのもとにてそがカゼ
となりカゼがケとなりケがキとなりキがカとなるもの
にて車の輪のめぐれるが如くはじめもをはりもなくし
てはこのもはじめもをはりもなきものなりまたそのキが
さらにあげつらへばカイのキにてイキシの三言は風の本
中末なるものなりそは息(イキ)のイより氣(キ)のキとなり氣のキ
より嵐木枯などのシとなるなりこのシは十月のシグレの
シ十一月のシモのシ十二月のシハツのシにてひとゝせの
風のふきそむるをはりなり息のイはアウと口(クチ)が開合せ

るそのこゑよりいづる言なるぞまづハアと口(クチ)があけば
春の風の如くあたゝかなる息のいづるものにてフウと
口(クチ)をふさげば冬の風の如くさむき息のいづるものなりこ
のフウといふ冬の風が風の至極にてフカンフキフクフケと活
用するぞこのしまゝフはハウの約(ツヾマ)りたる聲ゆゑなりつまり
たるものを何にてもふきたをすぞかくの如く言靈(コトダマ)のく
しびなることかぎりなしとこのべくてしもなゝぬこととなり龍
田に坐す風の神が天乃御柱命國乃御柱命とまをすこと
まゝ報風依風のまこのちがはれ(ウダナ)の風のこととききなどこのさ
ねていふべし　神世よりふきつたへりし久方の天の御

風を知る人ぞなき

次生木神名久久能智神 此神名亦以音

久々ハ木の生ひ出て延び立さまをいふ辞にてこは能く万木が生ひ茂らしむる徳を持る木の祖神といふ名義なり智ハ血を分て子を生ましむる父のチ物を摂持し成長せしむる地のチ等と同義にて中巻七十四なる吉野の國主等の歌にある麻呂賀知の知と全く同じ辞にて親しくよりもさきて尊稱せる辞なりクとくゞまりゐたるをクキと立のびいづさバ即木なり莖なりクは屈せる辞なれどそをクヽとのさなすれバこのへりてのびたつ辞になることゝすの鳥のまさまとびんとするときこのへりくつばさをのばむるにひとしきことをもつて知るべし前なる志那都比古の神風にふかれてクヽマリたる万木の此久久能智の神靈によりてクヽとのびたつことをうるなり 久々の智の神の御靈のなる風に花こそさそへ木枯の森此神が生たまふは家をつくる爲にて蒼生が雨露のなやみをのがれ家の内に安けく養ひたまはんとの神意の大慈大悲なりゆゑに大殿祭の祝詞に屋船久久能遲命屋船豐宇氣姫命とならべ給ふ御名をたゝへまつり家は外より身をおほひ食は内より命をたもてるものなればなるべし屋船といふことは祝詞考に彌

生根の義といへるもさることなれど屋と船とはわか
ひいふことのせいふことのたがひは何まれどともは物が
いふくめにてその形もうつくみに打かへしたると打ふ
せたることのたがひぞうりゆゑこれひとつらに屋船とい
へるにて二神がともに屋船志なぐとたゝへまをせれ大
殿祭の祝詞ゆゑなるべし通證三十八に大田命傳註瑞舎號
屋船等といへるがわかいひ何そせそこのみなふべしまる此
祝詞に葛目能緩比取葺計會草乃噪岐無久とある以て稲草藁縄の義思ふべし云云

次生山神名大山上津見神。

山津持にて山が持坐神なりと師説なり奥に又種々の山
津見とあるは分て持神是れ丸て持神なる故大と稱まこのと
記傳はいへり山の名義は上にいへるが如く彌増なり木神
の次に山神が生ませたまふは万木が彌生に生立榮えむ
べき處は山なるが故なるべしひさ人がそみなはうちく
ものせる家もまさつの女があさげゆふげがたくたき
ぎもさな木の神山の神のさまものにそあれ人と
はぬ山櫻戸がひとりあけて花見るもまさ神の御ふゆぞ
住山學賢易出世守愚難誰弄左琴了右書信手肴足引
の山の椎柴をりたきてふく見ゐるそうりたぬしきへなし
空々又寂々誰訪小僧家穿壁眞如月落衣法性花 世の

塵にそまぬ色こそめでたくれ柴の戸おそその山ざくら花
樹下清風好山僧豈羨官人間花片々石上隔流看 書見
るによろしありそり花ちりてたづぬる人も夏の山寺
弓矢とる身ふしなうねがやそぎ初音ぞ山のさちになな
りぬる 楓林携杖歩松屋抱琴眠雖不奇才子山僧亦樂天
ましづかなる谷の戸ぞその琴の音はかよひなれぬるミ
ねの松風 なけてはる空にましけてのこりぬりしのうく
れなゐの山は端の月 庭前看落葉爐畔聴松風面壁誰闘
坐靈山最樂公 あはくそて酒のむこともなきやどはち
りしましなる庭のもみぢ葉 夕づく日さきやきこのべよ

冬ごしもまづ白菊の花ぞよそへつる春きぬとぬるむ志
らづはこのげ見にて先さく花を梅よぞりぬる 欲聞蛙獨
出山霞黄鳥將眠野徑花遠近幽聲春暮趣一霄抱月宿田家
なきかの聲小田の蛙のこゑぐはあはれのきそふ春の
夕暮 人去月來墨水坡獨吟獨歩不知他香風飛雪橋場渡
都鳥枕花眠緑波に すみだ川花見にらしてあかぬ夜の月
な歌へるうたぐれをきく 閑談坐愛艸堂花緩歩微吟處
々花野外杉村聞杜宇山中猶有未開花 ふとりめあそ
しの山にきて見ればそれを花のさかりぞわかれに 掲簾
草堂招晩風隔垣莞席語隣翁五更鐘響西山外九漢雁横明

月中　まつぶさよすみくこそ見れ秋の夜の月はよこさ
ふのりの玉章　山僧牽杖下田野百花香坐草曲江上直心
是道場　ありひきや法のくしやまをたちとぞく浮世の中よ
まさきまむとぞ　雨晴雲亦盡山月放光輝孤笛起何處江
心漁火微　海士の子の笛ふきすまとしあまなり夜なるれ
さちぞや月はこのふらん　隨風花片々月下絶人聲駐杖獨
徽笑東台春夜情　東台花下夢頓覺草理階苔結玄賓室山
田遂素懐　昔時布金地今日草茲々誰笑千年後却憐古戦
場　あそれとてたづぬる人もなきたまのあとぞしむ志の
ぶとこのはべの塚　東台寒夜月偶坐對長松往事皆如夢將

來獨悅意　蓬生の宿のひそれ如今ぞしるのくふく月は
ふくろふのこゑ　尋花山寺詰帶月草庵歸天祿在知足今
春笑昨非　山寺の花のあとよそ日わられぬこゑるさおく
れ春の夜の月　色香中道理仰月對花知且暮繙經外詩歌
亦我師　うつやまとふくの林よりけりくなき世の人を
とふもたのしな　東台未得還諸德笑吾頭飛錫向西法花
池寶樹間　天てらす神の御ふあ如のぶりく佛の國へゆ
うむとぞおもふ　とはまろが一癖なる筆のすさびなれ
ば人ちのまらひまじぞ
次生野神名鹿屋野比賣神亦名謂野椎神。

自志那都比古神至野椎并四神。

鹿屋ハ茅の借字なり前なる久々能智ハ木の祖神ゆゑ智
といひ大山津見ハ山の持主ゆゑ見といへるにて此神ハ野
の持主ながらまた草の祖神にまそゆゑ一柱にて二名を
るなるべし御國にてむかしより木草をもて男女がすまふ
いへにはすまれるはやゆゑん山の神の次に此神が生ましま
ふハ益人らが山の木にてつくれる家の屋根をふく草が
生ひ茂らしむる為がむねとしたまふなるべし野が又と
いふハ古言にのそたなびらがひらきのべたるが如く平らか
なるところを野といふなり草のなりにて茅は雨はつよ

きものゆゑこそ屋根をふく草とちらせるなり　痴僧稀早
起月白草青々了得天真趣清風繞野亭生ひしげる庭の
あることやこのりは庵にのれなどとありてふかむとぞおもふ
閑庭秋草裡幽趣有誰知我想寒山月虫吟泣露詩　されむ
りけるありこのさやこのは見ゆるまで月のかげさへさゆる庭の草村
古人の歌は　神道へ白木造りに茅の屋根萱手のねだに
立し御鏡とかけり御國人はこのくさむ心がわすれつべくのりける
カヤといふ言ハ草の惣名ともとりて人どもに吾屋をふく
草といふことよりやいひそめたらんまでこのぶら矢の立るこの
如く野に生るかのこのしきのいひそめたらんおやつこのあしに

〻サといふ言ハ八千種とてその種類のいと〳〵多かるゆゑ志
げれるなれバその〻クは區別の〻クその〻サは差別の〻サと同
じ心なるべしまた〻クとをこしさしいでくなびくハ草にて
〻クと大に高くのび立ハ木なり上代ハ大御殿より賤が伏
屋まで皆草もて葺つるものにぞありける　月ハもれ雨ハ
とまらぬとおもふよりまづがふせやおふきぞまづらふと
西行上人の志るしおけるれたる言の葉草に心ひかれて
ひとりぬるまつがふせやの春の雨おとせぬ人のけふぞ
こひしき註に并四柱とあるハ前後の神等を一連なるぞ此
は那美命の生坐る神なりと結べるなり椎の下に神字脱た

るなのこと記傳にいへり
此大山津見神野椎神二神因山野持別而
生神名天之狹土神訓土云豆知下效之次國之狹土
神次天之狹霧神次國之狹霧神次天之闇
戸神次國之闇戸神次大戸惑子神訓惑云麻刀比下效之
次大戸惑女神自天之狹土神至大戸惑女神并八神
記傳五十四丁に野椎神九て上に某神亦名謂某神と有て下其
神の事ぬ云ときハ其亦名の方を挙る此記の例なり又狹土
神の狹ハ志那の切りたる言にてその志那ハ級にて坂路
のことなり狹ハ坂土の豆ハ助辞知ハ尊稱にて坂豆知な

り註に訓土云豆知これハ豆を濁るべきなるなり狹霧の狹
も狹土の狹と同じ伎理ハ限の意にて佐疑理が境と同じ
闇戸の戸は處闇は谷のことなり上件水分神より次々皆
天之國之と云へるハ二柱坐神の名を對て稱たるまゝにて
天と國とは殊なる意ハあるべからねど太戸惑子の戸麻刀
ハ刀妻麻理處にて山の多和美て低き處を云さて比比古
比賣ハ例の稱なるを惑子惑女としも書るはたゞよく語の
より來たるまゝの借字のくなり右八柱の名義因山野持
別而生とあるに就て考へ知べきなり上の因河海持別而生
ませる神たちの名の皆水によれると思合せべしといへ

りど此考ハなほ坂と坂合と谷と山の低き處とのくちなれバ
山は因たるさまハ見ゆれど野は因たるさまハさらに見え
ざるなりまた山と野と其處まで高低のたがひなりま
た霧はしも地より立と空より降るとのわかちあらざるにの
なりさらバ天之國之といふも其意ありて志のいへるな
るべしゆゑに此考へうけがたしとは記傳のまゝの考に
又思ふに狹土狹霧の狹ハ多く詞の上に加る辭土も霧も
闇も惑も皆字の意にて土より霧の發その霧によりて闇
く闇きによりて惑ふと云意に名づけしか戸は所なり俗
にとまどふと云はこれなり此考やまさらんには聞ゆべき

ど然る意もて神ノ名を負せ奉むことゝいふべしといはれたる後の考にてよそれ狭土の狭ハ真の義なるさせべき義にて狭霧の狭ハこまかき義なり霧ハ切の義にてキリのキへカキの約りたるキにてものをへだてかぎりをつくる言の心なるキなり域をキといひ垣をカキといふ同じ意にて内と外とをわかちへだてゝ物をかくすものなり霧も物をたちへだてゝかくすものなりリはそをたすけたる良行の詞なり紀の一書に國狭槌國狭立といふ名も見えたる祝詞に狭國者廣久などゝ見えたりこれ是れをこゝに考合せて言の心を解べし　高山と廣き野原とこのひにあるをとめ

ぐさとをいふべきなりこのなさて此神々は野に山に里におりなべてものゝうまれなりいづる為に天に地にまつりてよく四時の氣候をとゝのへ給て田なつものゝ畑つものゝ實のりよろしからんことをむねと神はかりにはかりてとゝのへたまふ神々なり風のふくべき時は風ふき雨のふるべき時に雨ふり霧の立べき時は霧の立て豊年のしるしなる田は手もてつくるものゝ第一なる稲をつくるところにて其御手町田を百姓のつくるはただちにみてものをうるによれる名にて畑ハその田のなきにはつきてあるものゝゆゑの名なり　やつかの穂のそのりよろしき田の面見て物思ひも

なき秋の夕暮

次生神名鳥之石楠船神。亦名謂天鳥船。

次生は野椎神の次にて是より又那美命の生坐るなり鳥之は鳥の如く行ことの疾きをいふ名にてまこ水鳥の浮べるさまによそへていへる名なるべし紀の一書に素戔嗚尊曰韓郷之嶋是有金銀若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也乃抜鬚髯散之即成杉又抜散胸毛是成檜尻毛是成柀柀此云磨紀眉毛是成櫲樟已而定其當用乃稱之曰杉及櫲樟此兩樹者可以爲浮寶檜可以爲瑞宮之材柀可以爲顯見蒼生奥津棄戸將臥之具棄戸此云須多杯夫須噉八十木種皆能播生

と見ゆたかりしを青山を枯山になきからしましたるがつくれへませし神業なるべし杉を楠を船に作るによろしきこと神世のむかしさえはかゝくの如くをしへおほせましたる神業を以て後世の諸神たちもれなきことおほふべし方今外國を始めたる事どもを伝へぬることもやくも神代は神々いとよく知ろしめしたることは案に見える柀は地は埋みでもなやましからず幾年経てぬるものといへり楠のそなしく則て石とかなりし杉のとをもて酒をつくろしく船によろしきは世人の知るところはよく檜は御胸の毛の化り成きるなれば火をきりいふべきもと木となりてまた人の家

つくるにはよろしきなれもくしきこととはなへなさてハネといふ言へふなやこの根が水はさしひたりて奥つ鳥鴨でふ鳥の如く浪の上に浮び心のまにまにのなしこなすことへきありへゆくものなれは此名なるべし亦此神が生れたまふはさでは海河野山が知らせ神々生まませしうへにかくその海川をわたる船が知りおはせ神がうまし蒼生がやしなふべき田畑の物がなくしそとしその外さまざまの物らをなすことへおくりもしたこびもする為に生れたまふなるべくやあらん よをはこのこともそらくとひきかへてえやこよのあるるなどの川舟記傳に此亦名にも神と云ぬなどが以見ざれ

是ハ直に船が指て神と申歟されど次生神名と云下に天鳥船神副建御雷神而遣とあるが思へば正しき神とも聞ゆといひ通證三十丁に延佳曰生者始造之也といへりこのをの子らはいまだ即事而真の神理にくらきゆゑはすべて凡見もていふのりのゆゑつらふはこそおのが身とおのが魂とがこのへり見はことわりのましてことなりぬはめ

次生大宜都比賣神。此神名以音

記傳に宜ハ食都ハ例の助辞なりさて此食が放ては宇氣と云下なる豊宇氣毘賣神書紀の保食神など是なり此ハ大食と連く故に宇が省て云又宇氣が轉て宇迦とも云下

なる宇迦之御魂神書紀神武巻の稲魂女など是なり如是
きば氣宇氣宇迦なる同言にて右の神等の御名いづれも
此食の意なりさて御食津神と云は正しく此と同名なり
上は粟國の亦名も此と同意以稱しなり一神には非ず又
下は須佐之男命の食物を乞しは此なると一神なるべし
といへり大いにたゝへていへる辭なり豊宇氣の大神はたゞ稲の
御神ゆゑ豊と申此神はすべて五種の大元の神にはましませ故
は大といふなり粟國はことの外よくできる國ゆゑの名
なり宜は何にても地より生ひ出る物が「ケ」とも「キ」とも「カ」
とも「コ」ともいふなり人身より生まるゝものをもまたしかあり

いへりその毛を「ケ」といふは草の「ク」にて知るべく「コ」とい
ふは木の「コ」にて知るべしされば稲粟等をすべて大地より生
ずる毛なるがゆゑは食物をすべて「ケ」といふなり「ウ」はそが
うづまきもちて能く生ひ立むる力がそなはそへつくるがい
ふそは「ウ」と物を抑へまて「ム」と物を揚る時の聲なるまて
おのひ知るべしされば「ウケ」と生ひ出るものゆゑ「ケ」とも
「ウケ」ともいふなり真淵は豊宇氣の宇を紀の一書によりて
飢の義と見より考べし此御神は食物の大本ゆゑ大宜津
といひ女神にましませば此神の御身より稲粟等が生りて益
人が養育まつりたまふ御いさをしまさにこそ悲母の子が生育

なるなひをりきゆゑなるべし神々の男となり女となり
て世にいでゝはなべてことごとく皆即事而真方便為究意の甚深
なる神理ありての神業ぞと信知すべし其では海神より
船神まで皆能く生給ふたまへるゆゑにことびは正(マサ)しく蒼生
を養育すべき食物(フシモノ)の大本なる此神を生ませたまへりつぎ
ては食物をヲシモノといふ言の心をいそびくは物をさにし
づゝ口中に含み歯もてかみ舌もてヲレアヂハヒテくらふるの
故に飲食することをヲシヲスヲセといふなり大にカ(ラ)をい
ざして重き物を手もて押すをばオシオスとおなじ老夫
をオキナ少男をヲトコ老女をオミナ少女をヲトメとい

ふ訓そもはとヲ配大小等の義のたがひあることを知る
べし教の字を書紀の古訓にはヲシヘヲシフとよみアヂハヒとも
よめるはそのこゝろはその語の心をおもひさとるべくして
の教の字をヲシヘヲシフまたアヂハヒとよめるをもて書籍を
フミと古人のいへる言の心もよく考ふるべきなりそはフミ
どふ言はフクミといふべきをフミといへるにてその心は書に
は種々の義旨義味をふくみ持るものゆゑその書に含蔵
し持(モテ)るところの旨趣をさとしづヲレアヂハヒカミカヘシテこま
かにそを分別領解することを人にさづくるをヲシヘヲシフ
といふことなれば書をフミといふはフクミとふことなるはかの

けつらふまでもなきことなり七月のことを文月といふも稲草の穂を含む月ゆゑの名なりされば書を文といふは文の字の音韻をとりてまうしなしいひしまゝ鳥の跡に故轉によりて蹈の義を以てまうしいふといひしまて外なくいへる説もあれど皆言の本義にはあらざるなり

次生火之夜藝速男神。夜藝二字以音亦名謂火之炫毘古神亦名謂火之迦具土神。加具二字以音

記傳に夜藝の夜字は迦の誤なるらん亦名の炫迦具などと同じ類なるべけれどもあり又夜藝なりとも焼の意なるべし濁音の藝を書る由は下の速の波を濁るべきを其濁を上へ轉せる上代の音便にて上なる豊久士比泥の處に委く云るが如し速は例の稱名なりといへり火の德用をいふ。物を焼くと照すと熱うつしむるの三ぞその勝用なる故に那美命の此神を生ましたまふよりて美蕃登をやかれ御身をなやまされまして遂に神避ませり此其焼用によりて火之夜藝速男の御名を得たまふところなり舊事紀に火焼速男とあるは義にかなへりといふべし火之炫毘古は記傳に炫は迦賀と訓べし靈異記に炫を加々也計利と訓り字書にも耀光也とも火光也とも明也とも注せり然るを舊事紀に火之焼彦とあるは依て延佳が焼字に改め

いるは非ざり舊事紀は信がたし此記諸本みな炫と作り
又師は炫を用ひて本能氐理と訓れき此記にもしかいへり
此説よろし前に火の焼用をいへるに重てかゞやきはいかにぞ
こは火光の照徳をもて御名を得たまふこと前には夜藝
といふが故に速男といひてこゝに炫といふが故に毘古といへるは
てそのむねよくきこえたり毘古の毘は日にて光明の義
なる稱名に用る辭なることよく知るべし然して夜のくらき時
そらもて爲はかゞり火をたくと世人のいふにても其の心を知
るべきなり火之迦具土のことと記傳に迦具は赫と云意其
は迦賀とも迦藝とも迦具とも迦宜とも活て同言なり迦

藝と云る例は若櫻宮殿の大御歌に火が加藝漏肥とよみ
給へる是なり迦宜は影と云是なりさて土は都へ例の助
辭知は例の尊稱なりさて右の三名の火之はほ能肥能と
訓べき例なり本能と訓は誤なりといへり火のことを漢土
にては「クハ」まて「カ」といへど御國にては火日ともまたく「ヒ」と
のみいへり何日などいふあり日は日のことなるを「カ」ともいひ
ます今日とのきてけふといふが如き「ケ」ともいへりこのかゞ
やきど言のもとは「ヒ」なる故今も「ヒノカグ」といへるなり迦具
とふ言此記に迦具漏比賣と見え竹取物語に赫奕姫とふ
名あり考合すべし土の「ケ」とふ言中巻の歌なる麻呂賀知

まうく久々能智のチと其義は同じかれどマロガチをばマロノチといひてもその義きこゆれどマロツチとはいひがたしこれも久多奈二行は相通ふ辞なれどツとはいひかたかるべくのそこはなほかんがふべきむねありと知るべきなりさて大宜都比賣神の次は此神が生ませたまへる五種の田なつもの畑つものが煮てうまくはをさし忍人をなのいのちがのどよはせさかえむ二命の御意なるべし火徳は大地にもとあり金鉄をも自在にせるもののゆゑに此神の次に金山の神の生ませまるにてそまづこの神が紀の一書には火産靈といへりこは一書に軻遇突智要埴山姫生稚産靈

等としある神徳のこのくより得たまへる御名なるべし

因生此子。美蕃登 此三字以音 見炙而病臥在。多具理邇 此四字以音 生神名金山毘古神。訓金云迦那下效此 次金山毘賣神。

記傳に美蕃登は御陰なり下に訓陰上云富登とあり名義は師ノ云含處なり萬葉に保々萬留とも布保隠とも云る同じ類も物を含む故の名なりとありといへりこれ王莖が含む處といふ心なるべしこの説さることなれど迦具土神の御身にも於陰所成神など見ゆれば含處が以て此蕃登といふ言の本義ともおもひがたしこは御身のうちにて胸

の如く上にもあらずまた足の如く下にもあらずして向股の中らなる程合の處ゆゑに蕃登といひその含處を焼きましたることをいへるにて前に目合もてこれ事をいへるとひとしき辞なるべしそのむね畝火山之美冨登などゝあるにて知るべしもし玉門の當体につきてホドといふ名義をとらむとありせば ハヒフヘホ の義もて奇々妙々ニとくべしゆゑは此言は両義にわたれる名義といふべくまた陰處をさしてしかいへることは男女にわたれる語なれど女ニいふもとくもとてもべし見炙を夜加延と良行を也行もといへへ古言なり病臥在とある病といふことの神典に見ゆ

見ゆるかくてぞそれも病なる語よりて其言の心をもてなるさまをいひくはしふは ヤマヒ のヤは矢神の如く火氣の御身をやきとかすをいひ マ は火氣の御身は全くまとはれるをいひ ヒ は焼速男神の火氣をいふなるべしされば己その火氣のやきめぐるまはく御身のなするかめあらなやえなやむともやえやむともいひ言ちてはきこえぬとあなひまさで打なびきふしたまふなれには疾病の字義も似たもそのむねにさるし紀の書には日神擧體不平とある私記は擧體病困とさるし此記の中巻に不平坐良志とあるを ヤクサミマスラレ とはなる言の心も痛矢串を身は須知るが如くその事の御

心の底までとをりてやきのしかばおほなひなやみおほひく
るしみおほひさびてまさらしとふことたくさにつゞめ
ていへば御身をいやなるし然御心もさびてまさらしと
ふことはヤクサミとしものゝ義なるべく即ヤキスサビの義な
りされば ヤマヒといふ言のおこりは火の神は御陰をやかれ
まししによりておこるぞと志るべし臥在の臥をコヤスといふは
古言にて聖德太子の御歌に伊比爾恵氐許夜勢屢と見え
此記にも都久由美能許夜流許夜理母とあるなり在字を
下に添へたるは萬葉三（二十四）に客爾臥有此旅人とある有字と
同く世理てふ辞にあたりて書る事と記傳にいへりこはコヤレ

マヤリとよむ事もあるべし多具理爾は書紀に爲吐と書り
和名抄に歐土倍止都久と有り言の意は縄などを手にてくる
か如く胸より物をたぐみあげつきあげてゲロゲロと口よ
り外へくりいだすをいふなり生神は次の屎尿に成神とあ
る例に依て此生をも那理麻世流と訓べしと記傳にいへる
はウミマセルとよまむよりはよけれどなほおもふにこはウ
マレマセルとよむべし大事忍男神より迦具土神まで皆是き
御陰より生ましたまへる神々ゆゑいづれも生の字を書り
故に火神までの生の字をばみなウミマスともウミマセルとも
よむべし然るにこゝなる金山の神は多具理に口よりい

でましゝる神なることをばウミマセル神とも申すべし されどとて次なる
波邇夜須毘古の如く那美命の御身より出たる其屎に於て
更に成出ませる神ともなれば那美命の御身より直に顕れ
出たる神なれば御陰と御口とのたがひはあれど御身より直に
いでましゝることは前の神々と同じきゆゑ成ませる神とも申べし
ことを以て生の字をもちひて成の字をば用ゐざるなり されど御意し
て御陰より生ませたまひし神にてはなくこれは多具理に御口より顕れ
出ませし神なればアレマシヽとウマレマシヽとはよむべし 此記には那美命
の御腹より直に生れ出しましゝをば嶋をも神をも
に生の字をもちひて書るをばいづれも成の字をもちひけ

り等なくいへるはいづれものゆゑ生とかけりけれ 幷八神者
因御刀所生之神者也なりと神々をもさへとことわれるところ
ろはいづれも生の字をもちひけりけがらしくてよもウミとウマレ
との二義あればその心してよく考よむべし 金山毘古の
名義は枯悩しなり 脳は瘁病なり 書紀に悶熱懊悩因為吐
とある意なり 枯と云故は中巻末に其兄八年之間
干萎病枯とある意なりと記傳にいへり 此二神は御陰より
生るべきものことわりなるは御口より生まさせし神にて
あれは金鉄等いづれも物を枯し悩せ用の強きものの故に
とすなりは記傳の説もその義なれどもカレナヤマシなり

とのくいふときは金銀銅鉄等のかねを知る神はますことゝなりそれがなかにしては金鉄等のかねを持知る神はまをすゆゑ物が枯し悩を神業なりと金山の文字の如く名義がたくべしかねの中にては金がすぐれて第一とせるゆゑ金の字がおきまくかねは山にあるもののゆゑ山といふなるべしそは取天金山之鐵と金鐵の文字がまゐるしけれどもさるはよく知るべきなりそは天上のことなれど金山の名義は金山毘古の金山と同義なるべしもしまこのかねにカレナヤマヽのら鐵をとりて八咫の御鏡がつくれりとはいふべからざるが故は文字の如く金山の義と見るべしこゝがカナヤマといふ

はカネヤマといへば金と山と二になるゆゑにしこのいへるをりカネといふ言の心はおさくしてねやりかへるの義なり火の神の次に此神の生坐ますさるはしづのをが小田をすきかへせ味鉏がくはさきものゝふのとりはく太刀等が物をべき為なるべし

次於屎成神名波邇夜須毘古神。此神名以音 次波邇夜須毘賣神。此神名以音

屎は和名抄に糞屎也和名久曽と見ゆこは口より喰ひたるものゝ身内にくだりとまりて底のかたにいづるものゆゑクソといひその出たるさまもまろきゆゑ屎麻理とい

ふ尻のことをしりといふはしりへさるものゝさしいつる
ところゆゑなりまた尻のことをカクレともいへりこは冨
登より後の方にある故なり波邇夜須は埴黏なり字鏡
に埏謂作泥物也禰也須とありさて如此御名を負せたる
は屎の形状の埴を泥夜志たるに似たればなり此神書紀
には土神埴山姫とあり式に大和國十市郡畝尾坐健土安
神社と見えたり此神を祭ることをきらふ人しもあれど
こは烏蒭瑟摩明王を佛家にてまつると同じことなり此
神は五穀を能く實登志むる爲地味を肥志めるをむねと
つかさどりまし神なり通證三十四に今按人之養生在五
穀而其滓穢爲二便二便復能滋五穀則此主糞培而言宜與
保食神章併按莊子曰臭腐復化爲神奇神奇復化爲臭腐と
見えたりある法師法花經を禮拜せしところ糞の字にい
たりいかに經文なればとて糞を禮拜すべきやとてその
字を拜さゞりきといふ物語あれどそは一切の諸法皆是妙
法なることをしらざるなり人身とても彼處より生き出
づるものなれば不淨といふときはきはめて不淨なりまた
これよきものとせられば父母所生身即證大覺位とてたふ
ともなるものなりこれ即妙法蓮花の法門なりされ
ば埴安神罔象女神また御歳神の御教に宜以牛宍置溝口

作男茎形以加之とある神業等を見聞きてあざけりてら
ふはよろしからぬことゝきこゆべし記傳に上件迦具土金
山波邇夜須と云名皆天香山に由縁あり先彼山の名迦具
土と同く又此神の所殺坐る身躰に諸の山津見神の成坐
るも山に由あり又石屋戸段に取天金山之鐵とある書
紀には天香山とあれば香山と金山とも由あり又波邇夜
須と云地名の倭の香山にあるも由ありこれらをおもふに
然ることゝは聞ゆれどいとめざましくも所以ありげなるゆゑ
に驚のしおくありといひまた古語拾遺の末に前件神代
之事説似盤古疑氷之意取信寔難然我國家神物靈蹤今皆

見存觸事有効不可謂虚といへるが如く實に信を取り難き
ことをなむいと多かる此天のことゝあるとおもへば御國のことゝ
御國のことゝあるとおもへば天のことゝ神のことゝあるとおもへば人
のことゝ人のことゝあるとおもへば神のことゝ昔のことゝあるとおも
へば今のことゝ今のことゝあるとおもへば昔のことゝ神のことゝおもへ
ば物物のことゝおもへば神にてそのことのうち何ともそこのりえがたく
きをいかにせんまゝ三栗の中昔までは神物靈蹤ともに
見存し事に觸まそ効も有つれど今はいとありては神物も靈
蹤も日に月にあくきまる事に觸まて効も無しこれをも
く信を取ることいよくあやしとをまへいかにせん神業

が以て九人がいざなふ御國の意をもよりひとむきなる
ぬぞとまりあるあきらけきのなかし志にのしむやこの
しや有無のあげつらひは世のそれなきむ 末の世はいのり
おきむるそのことの志るしなきにそ志るしなりけれ

次於尿成神名彌都波能賣神。

書紀は屎此云愈磨理和名抄は尿小便也由波利となりて
の由は也行のユにて矢の如く小水のゆきそそくるが志るの
いへるなりさて土と水とは穀物の成べき基なれば先此神
たち成坐なり又糞尿は土が肥し穀物が助け成物なれば
由縁あるをやと記傳にいへり彌都波といふ言の意は水といふ

のは至極微細なるものにて ニ と 終 なあつまりツ とつぐき
なかきて大河長流のこのうちが成せるが即水なる故にこの
なつりこまこのもハとそをなせばそふるるものなりそは
流水へ手が指入くミヅハといふ名義がさとるべしけだし
このミヅハといふ正義は水走りてハは早き心なり女子の尿
は男子よりそそしることといとせるどくはやきものありて
まよりてそこまでつる御名なりこそ集疏正は漢説なる因縁
といふもののつぎでミヅハは猶言水食在水中食人故也とい
へりこは闇御津羽神はいそまれしこる考なり 武藏野
の千艸の露のそぞけてやなこの三そのんる玉川の水なり

よしといて水くむ玉川のむかひのをかのはさをしかれな
九罔象女のかみくくしけづるさまぞ見ゆかのくぞかの池は
うつる青柳

次和久産巣日神。此神之子謂豊宇氣毘賣神。自和下四字以音

記傳に書紀に稚字が書り凡て稚を古言に和久と言る多し此神は書紀一書に軻遇突智娶埴山姫生稚産靈此神頭上生蠶與桑臍中生五穀とかゝるは異なる傳なれども豊宇氣毘賣神の御親なると合せて思へば既に土と水との神たち成坐て次に穀物の成るべき産靈の神なり和久とはただ何となく彌たゝるこのなこ穀物に由あるといへりこれ穀物に由ありてのことなるべしそれ新穀にかゝざれぬとしれ豊宇氣の種子といへなるかざるよのなり神々は徳が物にし形が人に志たまふとふふうきことなりが如めべし密門なる地水火風等の神々の如きかのく其身形なりて志なれますなかのく其物が自体として徳用がかどこせり今ゑこの神典なる神々もそと全く同じかるか多しまことは此深妙なる神理が能く解知して敬神の實信が發起するる人なりむべよし神典が口に説とも心の底には何としも神業が如なひるなべるこかやかがつのなし若能く思ひて此神域は皈入志

さる人ならば無始以來より不生不滅なるヿが神魂是を
神理なりけりと皇天の神理が深く信知して神德皇恩の
廣大至妙なることが真心(マコヽロ)は尊敬し天の岩戸の開けゝる
なりもつくやうれしかりけんと常は打よろこびつゝる
さふとき神理神德が志ろしめしていつもとこやみの世に
まよへるが如くかなしみなげきてくらきよりくらきにさ
まよふ人々にかゝりあきらけくさふとき御教のことと
なりがさとしてもろともに現世安穩後生善處の神業が
いそしみつとめて神德の廣大なることがよろこびいと
くしびなる神域にまゐのぼらんと夜に日にあがなふ神心(カムゴヽロ)

なりぬべし佛にも神にも人いかなるものがなぐて心が
あぐまゝつらむこのことかれ鸞師の和讃に彌陀ノ名號
トナヘツヽ信心マコトニウルヒトハ憶念ノ心ツ子ニシテ佛恩報(トム)
ズルオモヒアリとあるが如くまさ蓮公がふみにうれし
さがむかしは神につくりとよひいは身にもあまりぬ
るかなとあるが如く神德がよろこび皇恩がむくひ奉む
とあがふ日本心つねにあるものにこそさて豊宇氣毘賣ノ
神は大殿祭祝詞に是稻靈(ノミタマ)也と註せるが如くには伊勢の
外宮に坐ます等由氣(トユケノ)大神にて蒼生の食(クフ)て活(イク)べき物の第一
なる齋庭(ユニハノ)之穗(イナボ)の大御食(オホミケ)が守幸(マモリサキハ)ひたまふ御靈(ミタマ)の大神に坐

さる故のしこくも天照大御神この神が高天原の齋庭に祭りたまひしよりこのかた神祇官の西院にも大嘗の齋院にも祭り坐なり外宮に祭り坐せる大御神の神勅にて丹波國比沼の眞奈井に鎭りて坐しけるが大長谷天皇の御時に山田原へうつし奉りたるなり此大神がかくねもころに祭らしむる大御神の御神意は全く蒼生が安けく生育しさかえんとおもほしたまふなりけりかくたふとき御神意にましますなれば故に御國人たるものは外國人の如く金銀等はのみ目がつけて稲草がおろそかにはおもひのそしむるときは天神地祇の御意にそむくことぞとおもひうべし

てみて農業が第一につとむべきなり秋の田のかりほのいほのとまをあらみわがころもではつゆにぬれつつたかきやにのぼりてみれば天の下四方にけぶりて今ぞとみぬる天孫のことにあたりませしいまさく蒼生があさの如く見そなはしませくひたまはんが為にして蒼生が御心のまゝにかりつくへんが為にそはなし天上には甘露の美味なるが故に稲がもくをしものとせずともことたまりさるがことさらは齋庭にこがなのしたまへるはことくな天孫に此稲がまかせしがもて天の下なる民草がやすけくやしなひそのして天上の神域にいざなひた

まさんが為なる大御神の御心なり神武帝の大倭國へいで
ませしもまたこの御神意なりそは書紀に自天祖降跡以
逮于今一百七十九萬二千四百七十餘歳而遼邈之地猶未
霑於玉澤遂使邑有君村有長各自分疆用相凌躒抑又聞於
鹽土老翁曰東有美地青山四周其中亦有乗天磐船飛降者
余謂彼地必當足以恢弘天業光宅天下蓋六合之中心乎厥
飛降者謂是饒速日歟何不就而都之乎等とあるにてしるし
天皇ましまさぬときはつねに力をもて利をあらそふ
禍事の為に國民の心一日もやすきことなかるべしこく
をふこの九あまひて皇恩の廣大なることを民草は常にこ

しこそ奉るべきなり記傳に上に大宜都比賣ありて又此
に重て此神あるは疑はしといへるはいまだ此神と大宜都
比賣神とのわくのちがえさやありけん上の大宜都比賣神
は下にいる須佐之男命の為に殺されませし大宜都比賣
神にて此豊宇氣毘賣神はその殺されましゝる神の御身
より生出し五種の物を神産巣日御祖命の取らしめて穀
物の種と成したまふを大御神の營田にものしたまへる
が即天忍穂耳命にまこのせ奉し齋庭之穂にてその稲草を
守幸ひたまふ御靈神なりしてをもて天孫降臨の時齋庭
之穂とともに此神の御靈實に坐せて神鏡を降したまへり

是我水穂國の田成物の御靈神なり世は出雲種といへる岡
穂の稲種も天より降ししものにてそは出雲風土記に飯
石郡多禰郷所造天下大神大穴持命與須久奈比古命巡行
天下時稲種墮此處故云種と見えたり神樂の採物幣の歌
に美天久良波和加仁波阿良須阿女仁末須止與遠加比女
乃美也乃美天久良とありこの止與遠加比女は豊宇氣毘
賣がうつし誤れる物にて其宮は高天原にして天照大御
神の此神が祭賜ふ宮なりと記傳にはいへりけだし遠加は
宇賀が志のいへるにやなほかむがふべしさて此御神までに
國が産み神が生みたまふ神業が一段とちえたるにても

神々の御業は皆是利生利國の為なりけることをがさとる
べくはた此記は那美命の御陰より青人草が生くたまふ
とふことをあらはして毛もの鰭もの等が生くたまふことに
をのなきことそのが神典の尊く正しきところなれどもなに
とまりがこまよりはなはたふべきなり天神の大命が以て二
命の御國が生く御神が生くたまふは實にはやごとなき神
業なることいふことなりけるは伊はるなき事どもを知ゆるにのせるは
如何なる人なりとはよし萬巻の書がそらによみおぼゆると
もこの神典の正しきことをしりが知りたりとはいひがたし
故伊邪那美神者。因生火神。遂神避坐也。自天

鳥船至豊宇氣
毘賣神并八神

神避の神てふ言は神集神祝神逐神議なとの神にて凡て神の御上のことは附云言なり迦牟阿賀理も同じ御魂の御身を去ることと思ふは誤なり鎮火祭祝詞にはこのことを記傳にいへり神避てふ言は神の御上のことはいへる言なれどもかつけなくいふ名は大きなる心あることとなりてかゆるなせまなあく見るはきはめてかろし神の御業は凡情もて議り知りがたきことを故そのむねを知らしむる為につけいふ神とふ言ぞとおもふべし同じ産巣日の神を高ていひ神といふ皆是にてありくさのいふことなりま

さ神壮夫といふが如き神てふ言を何故につけさるぞとよく考ふ神てふ言をつくる心をさとるべし記傳に神集などの神てふ言と同義に今の神避の神を見たるはよろしかれども平田ぬしが鎮火祭の祝詞などひき出てあげつらふは神てふ言をなまめるあなせに凡人の心もて見るにらのこととなりてこの神避は此記の上にては御魂の御身を去て黄泉國へいでませしといふことと比婆の山に葬ることあるまであきらけきこととなりされど凡人の死にさると大きにことなるところある神業故に神避とはまをさなりこを佛の上にていふ非滅現滅の神業ゆゑ凡情を以て

そとより知りえがたくしといふところなり釋迦の死せるを
又は實は死して去りしを常在靈鷲山とて實は死せざるが
如き御神業ぞとおもひさとるべしあは凡情を以て死不
死を一定して偏固はむげつらふことをなさんやさてこ
とは萬葉二などは皇子の命にも坐ませしを神上りるといへる
といふごとくたふとがへる御心は神避坐るといへるをもてさときをも知る
べきなり幷八神とあるは神世七代の女男二柱を一代と
なせしが如く金山二柱を一神と取り波邇夜須二柱をも一
神と取りて十柱あるを八神とかぞへとぢめたるなり鳥
船の下にある神の字はおちたるか前詞にもなし

凡伊邪那岐伊邪那美二神共所生嶋壹拾肆嶋神參拾伍神。是伊邪那美神未神避以前所生。唯意能碁呂嶋者。非所生。亦蛭子與淡嶋不入子之例。

二柱共所生といへる大凡はまへのいへるありとまのよいふごとく那
美命の生ませし神々うちの生みたまへる神々をあませ
どそれをとりまぜて大事忍男神より豊宇氣毘賣神ま
でのぞふれば四拾柱坐せなり其中は那美命の御陰より
生みたまへるが拾七柱と御口より生ませる二柱と屎尿
は於て成ませる四柱と合せて二拾三柱坐せを參拾伍神とい
へるは水戸神野山神和久産巣日神の生みたまへるまで

がこなとりしらべて四拾柱坐なこの記傳にいへる如く石土毘古石巣比賣が一柱とし速秋津日子速秋津比賣が一柱とし大戸惑子大戸惑女が一柱とし金山毘古金山毘賣が一柱とし波邇夜須毘古波邇夜須毘賣が一柱としゝ數へたるなりこは神世七代の例と見えて下なる大年神の御子の數をも奥津日子奥津比賣が一柱として十六神としるせり女男二柱にて一の神業が妙に成し得たまふことゝなりまはれるなるべし此記に數の字が多く壹貮參肆伍陸漆捌玖拾佰仟と書り此が大字と云公式令に凡有數者爲大字とあるは大字といふものにてこは常の一二三などの字は畫の亦くてまがひやすき故なり子之例とある例は列の誤と見てミコノツラニとよむこそやよろしからん蛭子と淡嶋との如く全く御陰より生れたまへるにても御子となしまさぬもあり又屎尿に於て成ませしをも御子となしたまふが如きもありこはいづれもふのきむねあることゝおもふべしこのことゝ世間の親子すらもあることとなるぞかし

故爾伊邪那岐命詔之愛我那邇妹命乎。那邇二字以音下效之謂易子之一木乎乃匍匐御枕方。匍匐御足方而哭時。於御淚所成神坐香山

之畝尾木本。名泣澤女神。故其所神避之伊邪那美神者。葬出雲國與伯伎國堺比婆之山也

故爾をばカレコカルニとよむべしこの故も皆故のよむべし

愛は萬葉三十五大伴旅人歌に妻を指て愛人とあり又孝徳紀歌に于都倶之伊母我とあり愛重の意なる辞なり履中紀に汝妹此云儺邇毛とあるを記傳にひかれたれどこの紀は履中帝を指ていへる言にて妹は皇妃を指ていへる言なれば今とは其義たがへり故にこの那邇妹をば萬葉九卅二に妹名根同十七に奈弟乃美許等ともありまた中巻に那泥汝命とある那泥と同義にて邇は伊の韻きある故にナニといへるなれば凡妹といふけはナにかられくナニといへるなりと知るべし記傳に乎字は夜と訓べし此夜は呼出す辞にて余と云むが如しといへりヤとヨとの意は物を押ヤレバコリ引ヨスレと解知すべし註の邇字を爾とかける本はまろし謂易子之一木乎とある乎字は一端は疑ひて更に治定せる時は多く用る字なり故に子之一木に易つるこの易つるよと謂てと見るべしカヘツルカモとはよくよみとりといふべし乎字にはカヤヨの四義を持りと知るべし木を今ケとよむは私記に古者謂木爲介と見えます蓋古以貴

以喩於木故謂天下人民為青人草也と見えたる心ばへ木
といへる柱といふよりも言の意軽く聞えし上古より男を木
とし女を草とせり今もこの心にて一木ともかぞふるにて
あるべしさて此御詞は愛しく思す妹の命を一人の子に替て
神避坐せつることよと悼みたまへるなり乃字をばスナハ
チとよみてもよろしソコデといふ時の詞なり御枕方御足方
は書紀に頭邊此云麻苦羅陛脚邊此云阿度陛とあり匍匐
は新撰字鏡に匍匐也波良波比由久萬葉十九に赤駒
之腹婆布田為なども見えたりなるはやつぱおのれまで
もうつくしきをさもあへにと世はならせきしてゝらの

神業をば最愛の妻女を失ひたまへる賢者智者もよとふべし
愍せざれば人の心もなからましものくあはれはこれより
ぞしるこの色を好みるといふ古公亶父騶人孟軻もさて
しく我神典のこのそしをよそえたりといふべし哭は物の
思ふが如くはなしぬときをのおもひたへさる心のはき
なかれてかくと心ごのたてまつりかるるとそれよりて急がれて
音を發せるが即なくこゑなり御涙は泣沢女の意この記
傳にいへり香山は神名式は大和國十市郡天香山坐云々書
紀神武巻は香山此云介遇夜摩とあり伊豫國風土記の伊
豫郡自郡家以東北在天山所名天山由者倭在天加具山自

天天降時ニ分而以片端者天降於倭國以片端者天降於此土因謂天山也とあり萬葉ニ天降付天之芳來山とある意なり畝尾ノ木本は畝和名字稱此山の畝尾は西へ引ことをは東へは長く曳渡りしを今はその畝尾の形いさゝか残れり今は畝尾も木本も地名に為れりと記傳にいへり泣澤の名義はさもあらんとなくなどいへどもとかく文字の如く涙の目にたまれるさまは水沢によく似たるゆゑの名なるべし女神ニましませはたよわき御心にてなきたまふ御なさけより成ませる神ゆゑなるべし今日人間の上にても心よはき時には何事も女々しくて男々しき氣ざしがなきのしるし

るものなり萬葉二廿六哭澤之神社爾三輪須惠雖禱我王者高日所知と見えたり出雲の國名は須佐之男命の須賀宮を物したまふをりよみたまへる夜久毛多都の御歌詞より起りて國名となれるハ同命の四世の御孫にまします臣津野命の出雲國を修理たまふ時よりぞ國名となれりけるそは風土記に所以号出雲者八束水臣津野命詔八雲立詔之故云八雲立出雲とあるにて知るべしイデクモのデクを約くヅとしイヅモといふなり伯伎國とは和名抄に伯耆波々岐とあれども其義は那美命の事によりて母君國なるべしともいひまた箒の義なるべしともいへれどきこのとも

うけのさしこは出雲とちぎあへせつくりつゝ多し國と
ふ義にてハギハギが約くハ、キといふにや考ぺし堺は坂合
の義と記傳にいへりこは山のかひより見ゆる白雲なと
いへるが如くこれとこれとさしてこれなるこのぎり目がサ
カヒといふのカヒの約キなれば言のもとは裂の義なるサ
キなり比婆之山は出雲風土記鈔に比婆山蓋是能義郡母
理郷日波村山也と云り記傳五十三に澤眞風といふ人の此御
陵へ詣たる物語が能義郡なる母理より一里餘許西南方
にいつきたる高き山の上に徑四五尺許と見ゆる程塚の如
く小高き處の有て石の齋垣が造周らしたりとあるせり

比婆の婆が延佳本等には波と作せるが眞福寺本又卅本
によりて婆に改たるよし記傳にいへり眞風の物語は此山
上より北海などよく見渡さるといひまた日波村は此
山の麓なるよしなれば波にてもよきにや考ぺし紀の一
書に葬於紀伊國熊野之有馬村焉とあるは異なる一の傳
なりこが後に改葬せし處なとて此説はさらによりどこ
ろなきこぞり紀とあり有人のいへるには有馬村には御靈
が祭もるにて其神實は大なる女根石なりといへりなほ
たづぬべし葬は書紀に訶久志奉と訓て萬葉二なる人丸
の歌にて鎮火祭祝詞などにいへる石隱坐と同じ心にて神

避ませし御身を隠し奉まつるが葬とはいふなり檀弓にも葬
者藏也欲人之不得見也といへり和漢の事情おなじかる
べし人麿の高市皇子の殯宮の時よみたるうたにすて鎮火祭
なる石隠坐は其言二義にわたるべしそは前にいへり
ましてふるびし世はなほいでは殯としかのなきと
ふ心にて上にいへると石構の内に葬り奉るをかくいへ
るとなり日大神の天石戸にさしこもりませしとあるその
詞は似たれど其事は意もかはれり紀の一書に披可以爲
顯見蒼生奥津棄戸將臥之具と見ゆ又萬葉などは墓が
淤久都紀とよめるは中巻に弟橘比賣の御櫛が取て作御
陵而治置とある意にてなきからをふかくかくしをさめ
てかくる處が淤久都紀といへるにて名義は置つ城にてそこ
は永るおきところやすくうごかさぬがいふなりたゞ彼の
棺はをさへてもてゆくもと石の棺にもをさめてかくしまつ
るとのことのへるや上代貴賤のさだめのちなりとも　つひは
ゆくみちとはかねてきゝしかどきのふけふとはおもはそ
さりそり

於是伊邪那岐命拔所御佩之十拳劔斬其子迦具土神之頸爾著其御刀前之血走就湯津石村所成神名石拆神。次根拆神。次石

筒之男神。三神 次著御刀本血亦。走就湯津石村所成神名。甕速日神。次樋速日神。次建御雷之男神。亦名建布都神。布都二字以音下効之 亦名豐布都神。三神 次集御刀之手上血自手俣漏出所成神名。訓漏云久伎 闇淤加美神。淤以下三字以音下効此 次闇御津羽神。

所御佩とははかはきはくはけと活用せる辞にて何なりともはなれてあるものゝ身にまつはりつくることをハクといふなり十拳劔の拳は摶にて四指を並たる長さをいふこは物を握てその長さを量るをいふ上代の辞にて十拳は十握ほどの身の長さなる劔といふことなり八拳鬚などいふ八拳はたゞ長き鬚といふことなれど劔には八握九握十握などあるべきが實に十拳ある劔と見るもよろしくまたたゞ長き身の劔といふことゝ志一のいへるまでこは鬚に八拳劔は十拳あり又は八尋鏡は八咫など大凡にいふ上代の古語ぞと見るもよろしと知るべきなり劔のことは和名抄に四聲字苑云似劔而一刃曰刀似刀兩刃曰劔大刀和名太知小刀加太奈と見えたり劔の名義かいそく劔刀鞘從ツルリと抜出てスラリ〳〵と打振きば石はきれ人はきれツラリ〳〵とよくきるゝことなとくは熟苽か刺貫きて振

斯くの如く心のまゝなるものゆゑにこそ称へてつるぎ
とはいへるぞ古語の心なるべし諸刃片刃ともは上代
よりありしものにてそとは天上はも紀の二種のつるぎぞ
ちありとふことは諸天善神の古画が見てさとるべしタチ
といふ名義は断結の聲なるタチツテトの義が以て言の心が
知るべくカタナといふ名義はカタナグリといふことよそ両刃
は重きゆゑに片刃の軽きが好むことゝなりぬるは刃術
のすぐよりのことなるべし刃道のことはオヤトハナセ
の七聲の心がよくきこゆべくよろしかるべし頸は和名抄に
頸久比頭莖也とありクビレタル處ゆゑの名なるべし御刀
は景行紀に御刀此云彌波迦志とあり御佩たまふ劔といふ
ことが其用言が体言に言爲て即其物の名とせるなり御
執賜弓が御執と云皆この類なり前は劔の鋒のことなり
血がチといふ言の心は断結の聲なるタチのチの義にて
考知るべし數の千も身の血も妙なる名義なるぞ漢語な
きど地のチまゝ智のチ等も其旨いとよくきこゆるものな
り走就湯津石村とある湯津は紀の一書に又曰斬軻遇突
智時其血激越染於天八十河中所在五百箇磐石而因化成
神云々とあるによりてこれば五百が約なる與が湯とい
へるにて言の心は數の多きが湯津といへるなり石村の村

は群の義にて萬葉一[十四]に河上乃湯津磐村などあるに同
じく石の多くむらがりたるをいふなり走就といへるは御刀
の前に著たる血の手走りそゝぎありて天安河なる石村
に飛就たるその勢は成出ましゝ神の御名とふことな
り石拆はこの月山が打たる名刀の如く石をも切拆くべ
き勢の坐神とふことなり根拆は其石根までも一刀に切
拆などの勢ある神とふことなり石筒之男といへるは前二神
の上にもいよゝ勢の加りて男々しくます神とふことなり
‖ツヽふ言は同じことをかさねいふ時の辞なり花はちりつ
花はちりつゝといふべきを花はちりつゝといふが如し今石

拆石根拆石筒之男と石村に走就き三柱までひきつゞき
成出ませしゆゑに筒といへることゝ此下なる底津綿津見
神底筒之男神と其むね同じと知るべし書紀に鹽土老翁
鹽筒老翁とあるを此記に鹽椎神としるせるによりて石
筒を石津知と見るも一義なるべしさて此ところには何
きの石村ともことわりなけれども下に坐天安河河上之
天石屋名伊都之尾羽張神と見え此尾羽張神の御子建御
雷神に坐せるよし見えまた紀の一書に天安河の五百箇磐
石とあるを以て走就とある言の心を考て天安河の石村
と今いふなり手俣より漏出たる血によりて成ませし二

神は此國の神となれるなり此事が記傳にならびあつかざるは心のつかざりしなるべし此國より天安河まで血の走就くてふことハいかにといぶかるべかれどこは神業なり天若日子が射上たる矢すてもさることゝ知るべし弘法大師の三鈷が唐土より日本へなげこしまして一念の項に十萬億土が超る念佛が信受しなばこそかの神業がいかなるは愚なり神業の奇々妙々たること日ゝ大神の日々世界が一周しさきまふがあふぎ見奉りまた玉が以て日光の火がとくようつしとることらがあるひしぬびてさとるべし若しがさとらば野山の三鈷然ハ公が六字いづれも奇とせ

るに足らざることなり一念吽と真心がこむれバ天上天下十方世界に神魂が飛さんこと無㝵自在にして一切の事業みな天心のまゝなるべし我神典なる神誓の字氣比もこの二字の神理神徳にこそ釋紀六四引に天書がひける見れば此に成ましゝ三柱の神は星の神に坐なり紀の一書に天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國時二神曰天有惡神名曰天津甕星亦名天香香背男請先誅此神然後下撥葦原中國見ゆより此記すはたゞ星川臣とふことのゝ中巻に見ゆて星の神のことは見ゆざるなり野州の日光山にいとふるくより磐裂神が明星天子として祭

まり勝道上人の彼山を開けるも此星の神の加護なるよ
し古記に見えたり天書の説は後人の私意が加へたるを
のまやそあやしき説なれはたやすくうけがたしさ
れど迦具土神が斬さる血の安河なる石村に走就て星の
神となれるといふ説は上古よりありし傳なるべし星が‖ホ
シ‖といふ言の心は火石[ホイシ]といふことにてそは光ある石てふ
ことなり星のおちくるがとゞまれば石なりきといふこと
もふるくいへり漢土の書にも星が石なりといへること
ありまた神典の名義にもかなへりまた佛經の説にもあへ
り星のまを宮殿のことゝ經論の中にかとえりなつね見て

ほどの神語のさふときことがさとるべし神語に妄言なき
ことこのひとつがもても知るべきなり御刀本は書紀に
剱鐔と見ゆれば御刀の鐔本[ツバモト]に著る血といふことなり甕速
日神の甕は中巻に量[ニ]身[ヲ]高而讓[ニ]甕酒[ヲ]とあるが如く酒がつ
くる大瓱[カメ]のことなれどこは借字にてその‖ミカ‖のミに‖イ
のひゞきあるゆゑ即[チ]御嚴[ミイカ]の義にしてまづ其形の高く大
なるをもとにて相兼てことに此字が借用[カリモチ]たる彌名[イヤナ]なり
世人の高く大なる物が見て‖イカキモノ‖といふときざ情の
強[コハ]き者が見て‖イカツキモノ‖といふにて一言に二義が兼持
る辞ぞといふことが知るべし御といふ言は人皆の仰ぎ見て

このしらむ威徳がそなへもてるがゆゑそていへる稱名(タヘナ)なり
嚴牙重日がイカレボコイカレビといひまた源氏葵巻にまた
けくいかきひたぶる心いできて又手習巻にいかきさま
が人に見せむとおもひてなどあるまでイカといふ言の意
が能く知るべし甕栗(ミカグリ)はたゞイカグリといへることなりと
はミがイといへるなりと記傳にいへるいづれしそは嚴の
字がミカとよめることなく甕の字がイカとよめること
なきがもてその説のうけがたきがさとるべし記傳にはは
このあるがやまりなりく見ゆまがなく心いして見よイカ
といふ言の本がいそぐイと息が張りて心がこのさむきべね

のづからその形のいこのめしくこのどおちて見ゆるもののな
るぞこのしそはミといふことがそへてミイカリマスなどいへ
りそのミといふ言は見の義目の義御の義ぞとあるべくま
さ自よりいふと他よりいふとのまこのちがありと知るべしま
さミイカがミカと約ていふよし心あることぞと知るべし
速日の速は上瀬者瀬速などある速と同義なれどこの
速は御刀につきての御名ゆゑ疾(ト)く裂(ハゲシ)く猛(タケ)くきこさましき
意と見るべし日は上にいへる産巣日神の日と同意に見る
べしミカハヤとつぐきまさハヤヒとつゞく稱(タヘ)名なりこがた
このくいそぐ木曽義仲の勢が旭將軍と稱しけるとやゝ似ふ

稱名(タヽヘナ)はそも鎭火祭祝詞は御心一速比(イチハヤビ)などなる速比と全く同じくことそこての速日がそこ絶ゆことなるまでは ひとむきはとれる説はいえゆるからびてふかしのへぬ説ともいもんそは勝速日などなる御名の如きはカチハヤビカチハヤブルともいへいそるべかれど競速日とふ御名の如きがニギハヤビニギハヤブルといいつべこのへむぞされば活用の詞はそも物の名としもなきが体言とするこそもあきど速日とふ御名の日の字が用言の辞とひとむきは見るいこのい記傳は建日向日となる日の字をも用言の辞と見て向ひ向ふといふ活用の辞はあてたる日の字ぞといへましどこれは白日が向日と寫しなやまれるものぞとふこととは心づきでさる説がなせるなり正勝吾勝勝速日とふ御名を勝佐備の言あげはすれる御名としてたゞそやびそやぶるとふ用語とのそこが見るときは天穂日命等の御名はいとづきも日とふ稱名(タヽヘナ)ありそ忍穂耳命このそ御光はよれる日とふ稱名(タヽヘナ)なしといつべくやいぶらし日大神の御子はて御光はよれる稱名のなきことせいなるよくあるふべきなりよくこのむねが思ひさとらべそての速日も朝日が以て徳光がたゝへたるものぞとふことがあのづこのへまりてべし此記は國の名神の名人の名は日の字がつけまし

ども活用の辞なる上といふ言は日の字がつけることと三巻
のなかにもところもなしよりて甕速日とも一連の攦
て義がもこのてば三義なりと見るべくまた日の字をかへ日
子日女などいふ日と同義は見るべきなりこの神々は那
岐命の男々しき神剱のいと健き御意によりて成出ませ
し神ゆゑ御剱の神徳が以て稱たる御名なれば其心にて
考見るべし神剱がヒラリとヒラメカスとハヤ物が一刀両断
になせる此神の神威は神剱に即して世にも速疾堅利に
坐を故その徳光が甕速日と稱まをしたる御名ぞといふこと
と中巻に受取其横刀之時其熊野山之荒神自皆為切仆と

なる神剱の徳光がおもひ合せて見は太刀といふものは見
ると直に人の皆おそるゝものなりミイカのトといふ言の妙
ここになりミイカにてへまづおそしゆゑにミカハヤビといふぞ
神剱がとりそぐものゝふたる人々へぬこのきもして荒振もの
どもヒリとおそれさせる神威の徳光が證得すべき神
業が第一につことそまをすべくやなるん速日の日は即用言
而体言即体言而亦是徳光ぞと知るべし樋速日神の樋が
記傳に樋は例の借字なり書紀に熯と作り此字玉篇に火
盛乾也と註せる意なり火とこのくぞく樋字をしも借まる
は乾の意なればなり出雲風土記に樋速日子命とあるは

即此神なるべしといへりさて御國にては水はぬりよる衣
などが日まては火にてわしかへのせるがヒタリともいへ
まどたゞヒとのみいひてかなかきといふ義ともきこえか
たくあらそへるれど記傳にはこのとその名義がとかざれば
知りがたし今おもふに樋は正字なるべしそは太刀にては
俗に血流しとて樋がつきたるが世に多くありこは血が
そやくながしさらしむる為なればおのづから太刀の身
につける血のそやくかなへく義なりよりておもふに樋が
正字にて熯は其義を示したる文字にやあらん太刀には
いかものづくりとていかめしきさまになせしもあり

くまりてが打振る便利の為にとて身に樋がつきたるも
世にあることなれどもおもひあはせて前の神名と此神名
その義があひのぞみて考べしさてここは血が樋がつたへて
早くながれされはいかなるいかき太刀なりとも自由自
在に打振てんことと心のまゝなるべしゆゑに樋速日と稱名
がまをせるにこそ建御雷之男神書紀には甕槌と書り建は
健き御いさをしが不絶たる辞なる名にてこは武勇ある
かの軍功あるかいづれにしても健く男々しき神と人とに此
名が負せること倭健命の御名にて知るべし此神の如き
書紀に此神進日豈唯經津主神獨爲丈夫而我非丈夫者哉

其辭氣慷慨故以即配經津主神令平葦原中國と見えたり
御雷のミイカがミカといふは甕槌とあるにて知るべし（ツ
チは野椎のツチと同じ今雷とかき紀に槌とかけるもこ
はともに借字なれど上古此等の文字を以て御名をしる
しおけるは大空になりわたる雷の如くまづ物を打くだ
く槌の如き健く男々しき御稜威をそなへもちませる御
神といふことを知らせるたよりにて此等の文字を借用
ゐしるしつたへたるものと知るべしたゞ心なく書る文字と
のみな見そけざしめくいへぞとてこれもこれに皆しかる
文字と見るはあやまりてありあることぞこの建布都神の布
都は書紀に矛劔踊日部靈と見えて字書に部は断聲と注せ
りとは利刀を以て物を残なく切断するをフツときるとい
へる意にて神劔の利き徳をほめたゝへたる御名なり豊布
都神のこと建布都は人をしておそれしむる徳をいひ豊
布都は人をしてたゝふごとくおもむかせる徳あるをたゝへたる
御名なりまづ大日本刀をば萬國の人々までみな其刃の
堅利なるはいたくおそれながらまゝ其身の光り佐夜佐
夜たるを見てみなかしこく悦て得まほしがるぞ君子は勇
ありてたけからむぞといへり即是建布都豊布都の神徳な
りと得ふる皇朝の武士ともいふべき楠正成朝臣の歌に

仁と義と勇とやさしき大將は火にさへも焼ず水にもおぼ
れざるとなり此朝臣のみこなと川にいづるを行櫻井の陣より
返て生々の子の正行へあたへける遺書三巻なり其の中
にある神道正授之巻に君トシテハ無罪ヲ憎ミ臣トシテハ是非
ト云ズ君ヲ恨ル心起ラバ一念ニ太神宮ヲ念ジテ御名ヲ誦
セヨとなりまた四武の陣法をとけるなかには夫大極トハ天
地未分ノ空体ヲ云ズ人心ノ信ヲ以テ大極トス故ニ大將
信ケル時ハ六十四手一和シテ變化自在也等といひまた
傳法之起をあるせしなかに予討死セバ天下必尊氏ノ世
ト成ベシ然ト雖汝必義ヲ亡フ事勿レ夫諸法ハ因縁ヲ離

レズ君トナリ臣ト成ル事全私ニ非ズ生死禍福人情ノ私
曲ナルニ隨(シタガハ)ズ天命歴然トシテ遁ル所ナシ故ニ予後代ノ武
道ヲ示ス此時ニ命ヲ失フ事愚ナルニ非ズ等といへりあの
また太神宮の御名を誦せよといふ一言を見て三代の至忠は
こゝにこそなりそれと心づき嗚呼忠臣楠公語即是皇國ノ大
神呪と深く此語を神魂におさめひとゝなりし夕よりとのこの
さいつころひく朝日を打仰ぎ奉て太神宮の御名を稱念し
今日よりこれをこひねがはくは皇朝の道俗男女ことなお
しなべて朝なく太御神の御名を稱念し奉りて後に何業(ワザ)に
りともまづ神意を以て利國利生の為に自國他國の業(ワザ)ま

でいそしみつとめてよろしく堪忍を十分にしたるものは
楠公一人なりと東照源君も仰せたまへり日本魂といふこ
とはすべて御國をおもふの如く天神地祇のものしらすのみた
まふは何の為ぞといふことなきをよく真心にかなひしり
て御國の為に能く堪忍しつゝ利國利生の神業をいそしみ
つとむる日本心をこそ志への心得なれとするにあたはぬゆゑ
なり千種有功卿のうたに　やきたちはさやにをさめて
ますらをの心ましくおくべかりけりとあり日本武尊の
草那藝の御劔は御魂をとゞめまし東照源君の傳太光世
の太刀は日本心をとゞめましたる御神業すべて楠正行ぬ
しのかへらじとかねておもへばあづさ弓なきかずにい
る名をぞとゞむると吉野なる如意輪寺の過去帳に勤王
の義名をのこし四條縄手の露ときえまし日本魂こそ世
にもまたなき寶なりそれ　この君の日本心をあふぐの
な見るにつけてもよしのゝ花さて此神の亦の名を
るは何ゆゑぞといふにこの御神は師靈の神劔を以て有逆
命者即加斬戮歸順者仍加褒美ましして御國を平和し建
布都豊布都の神徳を全く顯したまへるがゆゑなるべし此
神のことを出雲國造が神賀詞に布都怒志命といへるは大
きにむねあることにて書紀に經津主神と此神と別神と

りて語るにもむねあるにて知るべし御刀之手上は書紀には劔の頭と書り今云柄(ツカ)のことなり中巻にも握横刀之手上(ヲ)と見えたり集とは打斬たまふ太刀の前と本とに著る血の傳ひ流来て握りたまふ御手のところに集りまれるをいへるなり手俣の俣字を延佳本には皆股に改めたれどこは字書には見えねばとて此方の古書はみな用ひきたれる字なれば改むべきにあらずと記傳にいへり手とテといふ物をタチツテトと通ずれば左右と二に分るるゆゑの名なりマタもマと全き物をタとわかしたちわかれば本は一にて末は二に分るるものぞ本のまゝにても各のまたなりて

も皆しかあるものにてマタといへば人のものいふなりおなじくもそよりさまざまの事のたちわかれいづるものなり此マタといふ言のうらかへはなるとタマとなりて玉の如くまろく全きものゝ名となるなりこのタマとマタとはいとくしびなるむねあれどこゝにはつきつくしがたし漏出は清水などの岩間よりクヾリ出ると同じことなり手俣は御劔の柄を握たまふ御手の指の俣のことにてそよりもりいでたる血ゆゑは太空へとびちらねば此國の神と成ませるなり闇淤加美の闇は此神の成て坐ます所をしかいへるにて其義は文字の如く日の光のさゝぬくらき谷合をいふなり

谷は埠堠の如く山と山と其山末のタと立ちあはされて其
山根のほとりとひとつはつきゝるそこき所を云といふなり
クラといふ言は山にまれ何にまれクルリと物のうちめぐるをいふが
本義にて物のめぐれば其内はくらきものゆゑそこをさし
てクラといふなり其くらき所へ物をかくしおくよ
りしてまた土をくぬりこめたるをも木もてつくれるをも
も蔵といふことゝはなれる也にてその物を置く所の蔵より
して人の身を置く座位をもクラクラヰといふことゝはなれる
なり記傳五十七に闇淤加美神の久良は谷のことなり大祓
詞に高山末短山之末與理佐久那太理爾落多支都速川能

云々これ谷川の水の落來るさまにて佐は真に通ふ言久
那は久良に通ひて谷のことゝ多理は少くも多くも水の落
るを云谷と云名もおと此多理の轉きるなるべし萬葉十七
に鶯能奈久久良多爾とよめるもこの久那太理と通ひて
たゞ谷のことゝぞといへりクラとタニとへ二義なるが一義
の如く說るはいかゞはまさ山の末は山の本に對していへるこ
とばにて山のいとさかきのことなりゆゑに佐久はサカといふこ
と那太理はサダルといふに同じことにてとは山末のたかの
きところよりさかおとしに水のながきおつるが志かい
へる古言なり太理爾の爾はてにをはの辭なりゆゑにこ

てはは谷をいふ言なきが谷と見たるはあまりやすまれるに
かのうぞや落瀧津速川之瀬といへるは速川が即谷川ゆゑことと
さかは谷といふでよるしとふことは心づかぬときぞと
はこそつぎてはいそで高山短山の短山が祝詞考にはオト山
とよそりことはかの荷田東丸がたかきに對比をひきしく
といふべきがミジカ山といひつべきろしといへるにおどろき
此記なる淤縢山てふ神名より考てあのよそるなれど高
山短山と祝詞にいへる其高短てふ言の意はいそゆる千丈が
嶽などいひく山のたけの長さ短さがたくしくべくありて
いふところよりそのたけれなかきのさが高山といひそ

めたけのくじのきのくが短山といへる上古の雅言が以
そのけるなりきと心づのおはすてタカとオトと相對しく
る古語もたくまる此記の淤縢山は一の山の上まて頭の
方が正鹿といひ胸の方が淤縢といふまであまりは別なる山
と山とが相望みて高山短山といへる大祓の詞とは其言の
心もとよりたがへるものぞと心づかぬ考なり後釋にも
こがまへのくあげつらへりといへどもさくの葉はふるやの
うきのごとたしまはきこゆるぞあるさく此神が書紀には
䨺と書て此云於箇美とあり字書には䨺は龍也と注せり
豊後國風土記に球珠郡球覃郷此村有泉昔景行天皇行幸

之時奉膳之人擬於御飯令汲泉水即有蛇龗謂於加美於是天皇勅云必将有鬼莫令汲用因斯名曰鬼泉因為名今謂球覃郷者訛也と見え萬葉十一にも吾崗之於可美爾言而令落雪之摧之彼所爾塵家武と見えたりまた雄略紀には天皇詔少子部連螺嬴曰朕欲見三諸岳神之形乃登三諸岳捉取大虵奉示天皇天皇不齋戒其雷虺々目精赫々天皇畏蔽目不見却入殿中使放於岳仍改賜名為雷とありこは三諸岳神といへれどただかの岳にませる大虵が神といへるに似たりまたあるが倭迹々姫命の為には大物主神の小虵と顕れて御身を示したまへるを證としてもかの大物主神なりといふべし

る人あまたありけりかくして今の淤加美は龍にも蛇にもありかくいへれどこは正しく神にて龍蛇の身を得て坐せるべし信州なる戸隠山の九頭龍大権現の如きまでは真の神ながら龍身を得て見は彼山に坐せりされば其の淤加美も下に布波能母遅久奴須奴神の淤加美神の女日河比賣を娶りて御子を生せることと見ゆれば只の大蛇にてはなく神ながら龍蛇の身形を得ましませて闇谷に坐す神と知るべきなりけりさし萬葉に吾崗と見え書紀に高龗とも見ゆれば木草の生ひ茂りていと闇き崗に坐す神にて淤加美は大嚙の義にてさらば闇御津羽は闇谷の水の中に

坐せる罔象神にて兼良公のいへる如く水食の義なるか能く
考べし神々の身形は人間の如く一様にてはなくさま〴〵
なることゝわが神典と佛經の説とよくかなへり漢籍には
人神曰鬼地神曰祇天神曰靈と見ゆ佛家にては鬼神道の
ことを閻浮提下五百由旬有閻王界縱横量等是根本處亦
有住閻浮提洲者有德者住花果樹林無德者居不淨處東西
二洲亦有鬼北洲唯有威德者諸天亦有隨生處形或居海渚
或在人間山林中或似人形或似獸形といへり我神典なる天
神地祇は佛家にていへば諸天善神にて佛家にいふ鬼神
は我神典なる黄泉の鬼神に似たりまた此中國なる荒振

惡神に似たり鬼趣ぞこのり果報に優劣のたぐひあるハ六道の
中になりしといへり闇御津羽神とは谷の水神なりと記傳に
いへり紀の一書には罔象とあり史記曰水之怪ハ龍罔象
或云罔象食人一名沐瞳と釋紀六号に見えたり

上件自石拆神以下。闇御津羽神以前。并八
神者因御刀所生之神者也

記傳に上件八神をすべては因御刀所生といへども分ていはゞ
石拆根拆石筒の三柱は石村により甕速日樋速日の二柱
は火神の火により闇淤加美闇御津羽の二柱は血により
さて劔は火に焼き又石に水そゝぎつ礪てその用をなせ

物なれば火と石と血とはなれる七柱の神等みな建御雷
の徳を助成たまへるなり故此八柱の中に建御雷神ぞ後
に專功を立たまへることしといへり火と血と不二なるを
とぞもおもふべし
所殺迦具土神之於頭所成神名正鹿山上
津見神。次於胸所成神名淤縢山津見神。淤縢
二字以音次於腹所成神名奧山上津見神。次於
陰所成神名闇山津見神。次於左手所成神
名志藝山津見神。志藝二字以音次於右手所成神
名羽山津見神。次於左足所成神名原山津
見神。次於右足所成神名戸山津見神。自正鹿山津見神至戸山津見神并八神
故所斬之刀名謂天之尾羽
張。亦名謂伊都之尾羽張。伊都二字以音
頭は和名抄に首加宇倍頭訓同上一云賀之良となり貴人
の頭を美久志といへば髪の毛の黒きをもていへるにて御髪
黒志をたゞ|ミクシ|といひ略しなるべく櫛の名を|クシ|と
いふもその黒髪へ串の如く刺ときめゆゑの名なるべし
真髪觸櫛といひまた紀の一書に老翁即取嚢中玄櫛投地
則化成五百箇竹林となるをもてまつおもひそるゝその奇
を|クシ|といふも玄妙の意なるべし記傳に正鹿は口決に真

坂なりと云り胸は身根の意にて淤縢は下處の意にて今も下る處を淤理斗と云なり續紀卅八に出雲臣弟山と云人名も見へたり腹は廣の意にて原平なども同じ義なり奥山は聞えたる如くなり陰は御番登と訓べし闇は前に云如く谷なり手は執なり志藝山は師說に繁山といふ意なりと云しき又直は繁山にても有なむ羽山は書紀に麓山祇と書て麓此云簸耶磨とあり端山の意と云說よろし又葉山にてもあるべし源重之歌に　筑波山は山しげゝ山茂ゝれど思入には障ざりけり原山は字の如けむ戶山は師云門山の意にて登夜麻なりと云しき今思ふに奥山に對て外山の意にてもありけん八神とは此段を書紀には三段に斬て各神に成るとも又五段に斬て五の山祇に成れりともありて此記とかく異なり所斬之刀は即迦具土を斬たまへる御刀なりといへり紀の一書に斬軻遇突智命爲五段此各化成五山祇一則首化爲大山祇二則身中化爲中山祇三則手化爲麓山祇四則腰化爲正勝山祇五則足化爲䨄山祇是時斬血激灑染於石礫樹草此草木沙石自含火之緣也とあるによりておもふに口決に真坂といへる腰の正勝かといふなり今は頭に於て成れるをいふ正鹿といふ言の意ことは「マサカ」のマは真の義全の義にて「サカ」は嵯峨の義なる

べしされば此神は御神の頭の如く山の嵯峨しき峻嶺の
頂に坐して餘が仕へ知る故に大山祇と申御名の意なる
べくまた正(マサ)は字の如くにて鹿(カ)は頭(カシラ)の義にて處の義なる
カなるべくやいかん胸が身根と見さるへよろし心の字
がムネともよみコヽロともよめりコヽロといふはコリコリがコ
ヽロといへるにて性相家にて心は集起の義といへると同義
なりムネのムは群結(ムレムスブ)のムと同義にてさまざまのことが見
聞くままに心にあつめそむるがいひネは根の
義にて其心は集め持るところよりさまざまのことが思ひ
起すの即(チ)能生の根の義なりさて胸が下處と見るはよろ

しこは下門に見る義もあるべし頭胸腹陰はたての次第
がいへるにて左の手は奥手にて右の手は邊手ゆゑ左を置
て先(マツ)邊手の右がさしいでしを何事をもなせゆゑ羽山
になれるなり左の手は繁山となれば奥の義にてしか
るべし左の足は山本の原の如くひきそひゐるものゆゑ
にて右の足も左より先に進み出るもののゆゑふもとの原
よりさきつのさへたちそなれさるる外山の名をしも得さ
るにこそ契沖和上の歌に　花見つゝさくれば淺しあつくも
のおくにおもひしこよしのゝ山　閨の戸がたたく水鶏
のさましつるゆゑをしのゝぬわしくぎきそあな　吹あせ

に田子の浦浪よるさへもひかるはかりのさぬ秋の夜の月
時雨ふり嵐ふきそひしげ山もそやまはあらはなる冬はさなは
くもりと見ゆるなり　住山中學道作佛好因縁可愛林間月照
來落葉前に木の葉ふるおとはきこえてはまかへどもまど
はくもらぬ月のかげかなと天之尾羽張といふは此神劒は
天上の神物なる故なり伊都之尾羽張といふハ此神劒は御
劒のことおもへば伊都之尾羽張神にて御稜威のことのよしにて
まをかゆゑにあかたくへ申なりこの神劒のことをいふの
しくおもふ人しもあるべけれどもこはこの密門なる三昧
耶形のことなりとおもへばさらにいふのみしきことといなき

なり伊都は稜威にて神威の畏むべきをいふその伊都の
伊は神息のことにて都はその神氣神息の十分にみちあ
つまりたるをいふなり尾は御劔のさきをいふなり羽張
は鳥のつばさの如く諸刃のするどく張出たる御劔の形
を申なり御劔の刄の『ハ』といふ言の意なれば文殊問經に稱婆
字時是解脱繫縛聲とあるをおもひまはし稱多字時是斷結
聲とあるを考て我神語のいふときことをさとるべし

日本政府図書
図書局文庫
内閣文庫

略解古事記巻第四終

明治七甲戌五月三十一日

官許

西京花屋町油小路東江入町
永田調兵衛

下谷南稲荷町
和泉屋庄次郎

東京書林

国立公文書館
National Archives of Japan